映像アーティスト田中功起さんインタビュー

「見慣れている日常の風景をちょっとだけ…」

作品の一部。クリスマスっぽい飾り付けがとってもかわいい

『田中功起展』"Turning the Lights On"が11月9日からCentre Aで開催されている。これと同時開催されているのが、バンクーバー市主催のプロジェクト"Intersection"。これは、キャラル通りとヘイスティングス通りの交差する辺りを光の芸術で照らそうというプロジェクトだ。

この両イベントへ参加する作品作りのため、田中功起さんは10月上旬にバンクーバー入り。展示作品の制作と会場の窓をいっぱいに使ったプロジェクション用の映像準備に5週間をかけ、大作ができあがった。

作品のテーマ

「テーマはライトアップです。原さんからもらったインターセプションのアイデア自体がすでにコンセプトを持っていたので、それ以上にこれを変えるよりは、それに乗っかった方がおもしろいと思ったんですよね。

この地域をライトアップするっていうこと自体にすでにポリティカルな意味もいろんな意味も含まれるわけじゃないですか。だったらそれに乗っかって、ぼくはプロジェクションをして、ライトを集めるということで、インターセプションが持っているコンセプトがより強化できると思ったんです。

そういう意味ではそれ以上の意味を求めてはいないんですけど、日常的なものがいろいろと違った見方ができるという面も見せたいと思いました」

アーティストになろうと思ったきっかけ

「よく聞かれるんですよ。特にないんですよね。低学年の頃は冒険家で、高学年になると漫画家になりたかったんです。それで漫画家になるのに必要なのはデッサン力だと。中学に入ってから美術部に入って。なんか違うなと思いながら高校行って、また美術部に入って。高校の時にデッサンを学べるのは、芸大しか知らなかったから、大学どこ行くって言われて、じゃあ芸大行きますって（笑）。

そうすると芸大に行く勉強のため東京の美術予備校に通って。その時には自分が何になりたいかっていう大本の理由が消えてしまって、その場にあるタスクをクリアできるかどうかが問題になってきていましたね。大学に入って初めて、そういえば何になりたかったのかなっていう思いに至ったんですよね」

雑誌編集とアート制作、二足のわらじ

「それでも、じゃあすぐにアーティストになりたかったかというと、わかんなかったですね。その時周りからはアーティストになるよりも物書きになった方がいいんじゃないかって、批評家とか。結果的に武蔵美（武蔵野美術大学）がやってる編集の出版局で働くことになったんです。3年編集の仕事をしました。

自分がその状況になり始めた頃に、ちょっとずつ展覧会の仕事が増えてきました。理由はその頃はあんまりビデオを作っている作家が日本にいなかったからでしょうね。2001年頃の展覧会で、その時制作したビデオが日本にちょっとない感じの作品だったので、その後一気に展覧会の仕事が増えてきました。

展覧会があれば1カ月くらい編集の仕事を休んでとうまく両立していましたね。（編集の）仕事が3年契約だったこともあり、それを終えて、現在に至るって感じです。

自分で作品をちゃんとつくって、作家としての活動になってきたのは2004年頃です。アメリカで半年くらいレジデンスやって帰ってきて、それからちょっとずつそういう意識になってきました」

展示作品。明かりたちが照らすものは会場だけではない気がした

アートってわかる必要がないもの

「（海外展示での自分の作品に対して）もっとも反応が薄いのが同じくらいの年の人たちです。子供とかおじいちゃん、おばあちゃんが結構反応がよかったりします。

それはたぶん、東京にいるとあんまり（アートを）見に行かない人たちでも、たまたま来ていたりするんですよ。そういう海外で暮らす同じ年くらいの人たちに

会って話しをすると、『やっぱりアートってわからないよねっ』て言うんですよね。でも、そんなの当たり前なんですよ。わかる、わからないっていう判断を物事に対してすること自体、意味がないんです。

わかる、わからない、できる、できないっていう仕分けの仕方自体がちょっと固いんですよ。そこが、海外で見に来ていた日本人の反応としてすごいびっくりします。いまだに『わかるわからないって言うんだ』って。

でも、サラダボール（サラダを透明な球体に入れて、渓流に流すというビデオ）の作品を群馬で見せた時、おじいちゃん、おばあちゃんがそこに来てて、『これ美味しそうだね』って。つまり、わかるわかんないじゃなくて、こうやって食べたら美味しそうだねって。年配の人たちの方が意外とオープンなのかなぁと思いましたね」

バンクーバーの印象

「ネガティブな印象は、小さい、田舎だなって思った。田舎の人たちが集まって、小さいコミュニティでワイワイやっている感じがして。外の人たちはそんなこと気にしないのになぁっていうことを気にしたり。そんな感じですね。

ポジティブな印象としては、コミュニティが小さい分、その中で集まって何かおもしろいことをやろうという勢いは東京よりはあるかなと。東京も小さいですけど、そういう田舎臭いことをやることが恥ずかしいっていう雰囲気なんですよね。なにかねじれてるんですけどね。

そういうところが全くないというか、すごくストレート。例えばおもしろくなくても『It's really great』みたいなこと言って（笑）。それでもそれを言うことによって次に繋がるかもしれなくて、そういう雰囲気がすごくいいなって思いました」

外から見たCentre Aの窓いっぱいに映し出された作品映像

自分たちの周りにあるものに気づく時

「もともと日常品を作品として展示するというのは、すでに存在する表現方法で、（現代アートの）歴史としてはオーソドックスです。ただ、僕が違うことをやれているとしたら、メッセージがないということが一番重要なポイントではないかなって思っています。

僕は作品というのは、メッセージがあってもなくても成り立つと思ってやっているんですよ。日常的動作とか、行為とか、物とかの中に、すでにいろんな意味が含まれていると思うんです。

作品を通して、それぞれの見ている人の見慣れている風景をちょっとだけより深く気づかせる。例えばこのテーブルはちゃんとテーブルなのか。実は紙でできていて、もしかして壊れるかもしれないとか。

そういうようなところを気づかせる感じで、作品が成り立つんじゃないかなって思っているんです。それはアートじゃなくてもいいし、アートと呼ぶ必要もないと思っています。

何かを気づかせるきっかけになるできごと、そういうことができればいいと。そこにある行為なり、物なりを通して、見に来た人がどう覚醒するかということに興味がありますね」

＊　＊　＊

キュレーターの原万希子さんは、「（彼の作品は）作者の年齢性別国籍不詳っていう感じですね。だれがつくっても不思議ではない作品なのに、言ってみれば誰でもできる作品なのに、それを見た時に『あっ、やってない』って気づかされる。そこにドキドキする感じです。自分でもできそうな感じがいいですね」と話す。

今回の見どころについては、「窓にプロジェクションするというのは新しい試みなので、新しい形のパブリックへのアプローチということでは、ぜひ見てほしいですよね。どういう反応があるのかも知りたいなって感じです。

今回の田中さんの場合は、新作であの場所に合わせて、彼がインスピレーションを受けたものであの場の可能性を引き出すものを作っていきたいと思いました。

だからあの場を生かした空間にしてもらうということが、どういう結果になるかというのも楽しみです」と話してくれた。

（取材　三島直美）

“Intersection”の最終日にフィナーレの大プロジェクター映像を手がけるアーティストのポール・ウォンさん（左）と田中功起さん。『田中功起展』“Turning the Lights On”のオープニングで

田中功起展『Turning the Lights On』は12月15日（土）まで、『インターセクション』は12月8日（土）まで、Centre Aとその周辺で開催されている。田中さんのプロジェクション映像は、期間中午後6時から夜中頃まで見られる。「しかし、この辺り一帯を夜歩くのはあまり安全ではないので、バスや車の中から楽しんでもらえれば」と原さんからのアドバイスだった。

詳しい問い合わせは、Centre Aまで。
住所：2 West Hastings, Vancouver
Tel:604-683-8326 Web:www.centrea.org
開館時間：火～土　11：00～18：00　日・月曜休館

田中功起さんプロフィール

1975年栃木県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。ビデオとインスタレーションという手法を使って「無数にあり得たかもしれない世界の可能性」を表現するビデオ映像アーティスト。主な国際展には、ニューヨーク近代美術館『Premieres』（ニューヨーク）、『美麗新世界』（北京）などがある。